

関係団体ヒアリング結果概要

【団体ヒアリングについて】

- スポーツ関係団体に対してヒアリングを実施し、スポーツに関する現状や課題、現場のニーズ等を把握。

- 障害者スポーツの普及・振興の観点から、(公財)日本パラスポーツ協会(12/8実施)、競技力向上の観点から、(一社)愛知県バレーボール協会(12/14実施)、スポーツツーリズムの振興の観点から、(一社)愛知県観光協会(12/20実施)に対してヒアリングを実施。

【団体概要】

(公財) 日本パラ スポーツ協会	<ul style="list-style-type: none"> ○ 東京都中央区に拠点を置き、国内の障害者スポーツを統括。 ○ 関連団体との連絡・調整やパラリンピックをめざす選手の育成・強化、全国障害者スポーツ大会をはじめとするスポーツ大会の開催・奨励、指導者の養成等を推進。
(一社) 愛知県 バレーボール協会	<ul style="list-style-type: none"> ○ (公財)愛知県スポーツ協会に加盟する競技団体。団体の体制強化のため、2021年に一般社団法人化。 ○ 県内におけるバレーボールの普及・振興のため、競技人口の拡大や指導者・審判員の養成、大会の招致等を推進。
(一社) 愛知県 観光協会	<ul style="list-style-type: none"> ○ 本県の観光振興の舵取り役として、関係団体と連携し、県内外の観光客誘致、観光情報の収集・提供等の取組を推進。2018年12月に地域連携DMO(観光地域づくり法人)に登録。 ○ 県内市町村や市町村観光協会、運輸交通事業者、宿泊施設など408団体が加盟(2022年6月現在)。

※ 大同特殊鋼(株)フェニックス、NPO法人ウィル大口スポーツクラブに対するヒアリング結果については、第3回策定委員会において報告済。

団体ヒアリング結果（（公財）日本パラスポーツ協会）

【幼少期からの運動習慣、学校における指導の充実について】

- ・ 素案に「幼児期から運動習慣を身につけることが重要」との記載があるが、これは障害のある児童にとっても非常に大切なことで、身体を動かすことに親しみ、運動・スポーツが楽しいと理解してもらうことが重要。障害のある方のスポーツへの無関心層の割合が高いのは、学童期にそういった教育を受けてこなかったことも原因であるのではないか。
- ・ その点、学校での指導が非常に重要であるが、教員も大変苦心されているようだ。特別支援学校はノウハウを持つ教員が多く、各校でプログラムを組んで取り組んでいただいているが、一般校の普通学級や特別支援学級に通う障害のある児童に対する支援は充分に行き届いていないと感じている。
- ・ 特別支援学校は不便な場所に立地していることが多く、学生はスクールバスを利用するが、OBやOGは学校へ向かう手段がなく、保護者の支援に頼らざるを得ない。アクセスが遠ければ拠点化は難しい。自宅からアクセスしやすい地域の小中学校の方が、障害のある児童にとっても利便性が高いのではないか。

【実施率の向上に向けた取組について】

- ・ 総合型地域スポーツクラブやサークル活動への参加など、身近な地域で日常的に運動・スポーツに取り組むことができる環境づくりを進めることが運動・スポーツの継続・定着には必要。
- ・ 障害者スポーツの振興となると、“新しく、大きなことに取り組まない”と思いがちであるが、普段クラブなどで実施している種目やレクリエーションで、いかに障害者の方が参加し、一緒に楽しむことができるのかを考えることも重要ではないか。新しい取組を始めることも大事なことだが、既存のクラブやサークルでの活動を少し工夫して、サポートしていくことが重要である。
- ・ 施策の根底には、肩に力を入れずにスポーツに関わるきっかけを持てるような取組が必要であり、それが継続的な活動につながる。そのような活動の中で競技スポーツに進みたい人が出てくれば、彼らを引っ張っていけるような仕組みが必要であると思う。

- ・ 実施率の向上のためには、“やりたいと思うスポーツがない”“苦手だから”“つまらないから”など、“1回はやってみたけれども、ネガティブな理由によりスポーツに関わらなくなった人”に対してアプローチをしていくべき。そうした方に対して、いかにスポーツが楽しいと感じてもらえるのかを検討していく必要がある。
- ・ 東京パラリンピックを見て、ある福祉施設関係者から“スポーツがますます遠い存在だと感じた”という意見があることを聞いた。エリートスポーツのことだと思うが、パラスポーツは幅広く、様々な目的があるものだと思う。スポーツには運動も含まれる認識を持ち、地域で誰でも参加できるラジオ体操など取り組みやすいものから始めても良い。スポーツの多様性を示していく中で、個々の選択の幅が生まれてくると良い。

【バリアフリーについて】

- ・ アクセシビリティを検討する上では、これからは“手助けがなくとも移動ができること”が重要なポイントとなる。聴覚障害者の方は文字情報、視覚障害の方は音声情報が必要であるが、自分で必要な情報をキャッチできるようにしていくことが必要。周囲の支援ももちろん必要であるが、町中を一人で歩くことができるように、その可能性を広げていく方向で考えていくことが必要である。
- ・ 新しく整備された施設は配慮が行き届いている。そういった施設は、中に入れば全く困ることはない。重要なのは会場までのアクセスであり、競技エリアや競技会場の外に問題がある。先日栃木県の全国障害者スポーツ大会に参加したが、会場は全く問題がなかったが、最寄駅から会場に辿り着くまでに苦勞が多い。スポーツイベントの開催を通じて、まちや人が変わっていけば良いと思う。

【今後の取組について】

- ・ 当協会の2030ビジョンには、“参加希望のある児童・生徒の学校体育の見学者をゼロにする”という目標を立てている。身体障害のある方に話を聞くと、「幼稚園までは他の児童と一緒に運動していたが、小学校だと周りや外見を気にするようになった。勉強は同じようにできても部活はできず、“自分は何なのだ”と思うこともあった」という話を聞いた。そういった複雑な状況・心情にある子どもたちに対して、運動・スポーツを活用し生活がより豊かになるような支援ができればと考えている。

団体ヒアリング結果（（一社）愛知県バレーボール協会）

【スポーツ人口の裾野拡大について】

- ・ 大会運営能力を高めることが当協会にとって大事であると認識している。大会の運営を通して培われていくものであり、大会をささえる人材の裾野を広げていくことが重要であるが、それだけではなく広報活動もしっかりとやっていきたいと考えており、最近ではSNSでの発信にも取り組んでいるところ。地道な取組ではあるが、非常に大切なことだと痛感している。
- ・ バレーは愛好家（サークル、クラブ、実業団等に属している方）の年齢層が広く、男女問わず取り組める競技であると思うが、コロナ禍により愛好家を大きく減らしてしまった。愛好者を復活させることは、ささえる人材の確保の上でも重要。少しずつでもコロナ前に戻していけるよう、仕掛けづくりをしていきたいと考えている。

【「みる」スポーツについて】

- ・ 例えば野球は、親子三代で野球場に観戦に行くことも多いと思うが、バレーボールの観戦者は一人の割合が非常に高い。バレーボールは「する」人口は多いと思うが、それが「みる」「ささえる」に直結していないと感じている。バレーボールも野球のように、親子連れ、祖父母と孫など多世代で観戦に行くようになれば、さらにファン層が広がっていくと思う。
- ・ そのためには、“コア層の周りの人”へのアプローチが重要であると感じている。潜在的なファンは多いと思うため、“周りの人”をいかにコア層に近づけていくのか。一方で“周りの人”は組織に属していないことが多いので、アプローチの方法を見定めていく必要がある。

【競技団体の体制強化について】

- ・ 競技団体も、経営能力を高めていくことが必要。活動の全てをボランティアで賄うことはできないし、全て給料を得るプロの職員が対応することもできない。周りを見ると、当団体のように職員を雇って活動している競技団体は少ない。ある程度のコアな仕事はプロが対応していくことが必要と考えており、そのための体制を整えていくことが重要。
- ・ そのためには資金の確保が必要。競技団体の主な収益源は登録費であるが、これだけでは賄えない。事業収益やスポンサー集めに奔走することが必要となるが、こうした業務にはプロの職員が必要だと思う。人・仕事・資金の好循環を生み出し、マネジメント能力を高めていくことが必要。

【国際大会の誘致について】

- ・ 来年、ネーションズリーグをガイシホールで開催する。愛知県では2018年の世界選手権以来のバレーボールの大規模大会となる。大会運営能力の向上には継続的な取組が必要となるため、何としても誘致したいと考えていた。アジア競技大会に活かしていきたいと考えているし、愛知県にはバレーボールのファンが多いため、会場が満員となるようしっかりと広報を行っていきたい。

【プロスポーツとの連携について】

- ・ 9月に「2022 Volleyball Week in AICHI」を開催した。Vリーグチームの対戦をはじめ、高校生チームの試合や小学生チームのスクールを実施したが、様々な世代のチームをつなげることが競技団体としての課題であると思う。このイベントを始め、各カテゴリーのチームとタッグを組みながら取り組んでいきたい。また、例えばプロチームと学生チームとの連携など、カテゴリー間の橋渡しの役割も担っていきたいと考えている。

【運動部活動の地域移行について】

- ・ 地域移行が進めば、必ず競技人口は減少の方向に進むと思うが、少なくとも維持を目指したい。競技団体として、指導者資格のある方の情報を市教委などに提供し、環境整備の支援ができればと考えているが、バレーボールの指導者資格の情報は国のスポーツ協会が持っており、当協会は捕捉できず、現時点ではそれが叶わない。
- ・ 県教委（部活動担当者）の方と話をする機会があったが、“地域移行が進めば、中総体（全国中学校体育大会）はなくなるのではないか”との話を聞いた。
- ・ これから増えていくであろうクラブチームは競技団体に属しているため、地域移行が進む上で、どのようにつながりを持っていくのかを検討していかなければならないと考えている。

【今後の取組について】

- ・ 障害者スポーツや高齢者のスポーツへのつながりをつくりたいと考えている。シッティングバレーやレクバレーが思い浮かぶが、今のところ協会には加入していただけておらず、競技人口は多いと思うが実態を把握できていない。色々なところにつながりをつくることが大切であると考えている。

団体ヒアリング結果（（一社）愛知県観光協会）

【スポーツを活かした地域振興について】

- 核となる観光資源のない場所では、スポーツ大会やイベントの開催により来訪のきっかけづくりに取り組むことも効果的であり、また練習スポットとして聖地化することも一つの方法である。スポーツは人を集められるため、観光と密接につながっている。きっかけがスポーツであっても、その地域に魅力的な観光地があれば足を伸ばしてくれる。スポーツを切り口として様々な魅力を発信することにより、交流人口やリピーターの創出にもつながると思う。
- スポーツを活かした地域振興を考えると、マラソン大会はまだまだポテンシャルがあると思う。距離がハーフマラソン以下となると日帰りとなってしまうが、フルマラソンとなれば参加者の多くが試走をするため、前日又は当日の宿泊需要も見込める。家族が応援に来れば、それだけ経済効果は増すとともに、地域が潤う機会も増えていく。
- マラソンの他には、自転車によるサイクルレースやロードレースなどの大会も良いと思っている。知多半島や渥美半島は、やや道幅が狭い箇所もあるが、風光明媚であり変化に富んだコース設定が可能であり、三河地区などの山間部をコース設定に組み込むことで、平地と山地のバランスの取れた非常にユニークなコース設定も可能となる。

【インバウンドに向けた取組について】

- インバウンドはコロナ禍により大きく数を減らしてしまったが、ここ数年で観光客の中心が団体旅行から少人数旅行へ、また物を大量に購入する「モノ消費」から体験に価値を見出す「コト消費」の旅行へシフトするなど、旅行のスタイルが変化している。アジア、特に中国からの観光客のトレンドに変化が出てきていると感じている。
- スマホがあれば、敢えて団体ツアーに参加せずとも観光が可能であるため、少人数旅行へのシフトは自然な流れなのだと思う。そのため、観光客のニーズに応える情報を、タイミングを見極めて発信していくことが今後のポイントとなると考えている。

【デジタル技術の活用について】

- 観光客のデータとして、どういった世代が、県内のどこに集まり、どういったイベントを周り、どこを起点に何日間滞在するのかといったデータを収集し、分析する取組を行っている。分析結果を事業につなげるのは少し先の話になるかも知れないが、愛知県には武将観光や街道観光など観光資源が点在しているため、データを活かしたマーケティングを展開していきたいと考えている。
- 新技術で言えば、実際には入れない場所にVR技術を活用して体感していただくなど、没入感の高い体験を提供する取組も増えてきている。

【アジア競技大会・アジアパラ競技大会に対する期待について】

- 両大会に多くの参加者、観戦者が来訪することになるため、観光資源として大いに期待している。競技会場が県内各地に点在しているが、競技会場の周辺に観るべき観光資源がない場所も多い。一方、観光資源はあるが誘客に関する発信力が脆弱であったり、宿泊施設も無いことなどにより、結果的に来訪者の落ち着く先が名古屋市内のホテルや旅館というケースもある。
- 市町村により様々な事情があると思うが、スポーツファンは、試合のない日には一般的なツーリストと同じように観光地を訪れる傾向にあるため、観戦だけではなく、地域の観光資源を観て、体験していただくなど、いかに飲食や宿泊などの観光消費につなげていくのかを検討していく必要がある。
- 県内には、温泉地など保養にも効果のある観光資源も点在しており期待している。また、自治体の中小スポーツ施設でも、工夫次第では練習拠点としての利用は可能であり、加えて、十分な大きさのある練習会場があれば合宿を誘致することも可能であると思う。合宿があれば県が推進するフレンドシップ事業にもつながっていくと思うし、地域の魅力を発信する機会も増えていくと思う。

【今後の取組について】

- 県内にスポーツチームが多く立地しているが、地元は出身選手を応援しているため、活躍した選手が地域のPRに協力するなど、地域貢献をしていただけると有難い。スポーツには、観光そのものの充実だけでなく、健康増進やスポーツ施設の有効利用、スポーツ商品・ファッションの需要喚起、そして、地域活性化に繋がる力があるので、大いに期待している。